
素直にSAY！

浅葱秋水

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

素直にSAY！

【Nコード】

N0177C

【作者名】

浅葱秋水

【あらすじ】

素直になれない主人公と、男勝りな彼女との物語。笑いあり？涙あり？

彼女の美奈と喧嘩した。きっかけは些細なことだった。ただ、友達の子の荷物を持ってあげただけ。その光景を見た美奈は俺の水月に見事な突きを放ち、去っていったのだ。それから、会う度に色々と言い合いになってしまった。

「流石は狂犬だな」

俺は一人、公園のベンチに座りながら、ポツリと呟いた。“狂犬”とは美奈の名字の“犬神”と凶暴な性格から考えられた、あだ名である。

桜が舞い散る公園では老人達が談笑しながら、ゲートボールを楽しんでいる。子供の姿は全く無い。

「少子高齢化の影響かな」

俺は空を見上げ、眺める。空に次々と美奈との思い出が浮かんでは、消えていく。かなり重症だな、俺。

「そこまで惚れてるってことか」

切れ長の瞳、遠慮無く喋る男口調の透き通るような声、長い栗色の髪、スレンダーな体、男勝りな性格、全てが愛しく思う。けど、素直になれない。好きだと言えない。

「はあ」

空に映る（もちろん俺にしか見えない）美奈とのスライドショーを見ながら、俺は溜息を吐いた。

「どうしたんじやい、坊や？」

老人特有の寂声が響き、俺は視線を空から降ろした。いつの間にか、俺の隣りに小柄なおばあちゃんが座っていた。

俺は高校三年だが、このおばあちゃんから見れば坊やなのだろうか。「ちよつと彼女と喧嘩してしまつて」

俺は苦笑を浮かべ、おばあちゃんの皺だらけの顔を見た。

「ふむ。若い時には良くあることじゃな。ワシにもあったわ」

おばあちゃんは皺だらけの顔に、よりいっそう皺を増やし、懐かしむような優しい笑顔を浮かべた。

「素直になれないんですね。好きなのに、言葉にして伝えられないんですよ。言葉にしないで伝わると思っていて、それがいつの間にか当たり前になってたんです」

気付いたら、全てを話していた。おばあちゃんの持つ優しい空気のお陰なのだろうか。

「確かに言葉にしくなくても伝わっているかもしれない。しかしな、言葉にするだけで色々と変わるもんなんじゃないよ」

「でも……今更言うのも恥ずかしいんですね。何て言えば良いか分からないですし」

今更自分の気持ちを言葉にして美奈に伝えるなんて、恥ずかしい。恥ずかしすぎる。それに言うべき言葉が分からない。

「何も恥ずかしがることも、難しいことでも無い。ただ、自分の想ったことをそのまま格好つけずに言えば良いんじゃないよ」

おばあちゃんはそのままで言うと、仲間と呼ばれたみたいで「よっこいしょ」と立ち上がった。

「とにかく、素直にじゃよ」

老人はゲートボールに使うハンマーのようなものを杖代わりにしながら、ゆっくりと仲間の元へと向かっていった。「素直に、か」空を見上げてみると、既にスライドショーは終わったのか、綺麗な夕焼けの色が広がっていた。

「よし！」

俺は勢い良く立ち上がり、携帯電話を取り出した。

携帯電話のアドレス帳のトップにある彼女の名前を選び、電話をかける。

「もしもし」

電話の呼び出し音が切れ、俺の大好きな透き通る声が背後から聞こえた。

振り返ると、そこに携帯電話を耳にあてている美奈の姿があった。

「えっ」

俺は携帯電話を切り、ポケットにしまいながら美奈を見る。

美奈は少し照れたような笑みを浮かべると、俺同様に携帯電話をしまった。

「……」

「……」

無言で見つめ合う俺と美奈。

素直に。自分の想ってることを素直に言えば良いんだ。必死に自分に言い聞かせるも、なかなか言葉が出て来ない。

それにしても、俺が無言なのはともかく、何で美奈まで無言なんだ。まさか、かなり怒ってる？「ごめん」

「スマン」

とりあえず謝っておこうとした俺の言葉と、美奈の思いがけない謝罪の言葉が重なった。

俺は頭を下げている為、美奈の表情は見れないが、本気で謝っているようだった。

顔を上げると、美奈は照れたような表情でこちらを見つめていた。

「こっちこそごめん。俺……」

「いや、悪いのは私だ。すまない。拓也はただ友達の女の子を助けてただけなのに、怒っちゃって」

美奈のその照れたような表情がとても綺麗で、愛しく想えた。

俺は俺とあまり変わらない長身の美奈をギュッと抱き締めた。

「えっ」

美奈は俺の中で驚いたような声を短く漏らした。

「……好きだよ、美奈。誰よりも、好きだよ」

「拓也……私も好き」

俺達はそのまま抱き合っていた。

しばらくすると、周りから拍手の嵐が沸き起こった。

驚き、辺りを見回してみるとゲートボールをしていた老人達が、いつの間にか俺達の周りを囲んでいた。その中にはアドバイスを

くれた、あのおばあちゃんもいる。

俺は美奈を抱き締めたまま、そのおばあちゃんへと笑顔に向けた。するとおばあちゃんは、あの皺だらけの優しい笑顔を浮かべた。

「あり……ぶへらあぁっ」

「恥ずかしいんだよ！」

俺のおばあちゃんへのお礼の言葉は、真っ赤な顔をした美奈の右拳によって遮られた。

殴られた顔を撫でながら、俺は美奈を見つめた。蛸のように真っ赤に顔を染めた美奈も、やっぱり可愛らしく、愛しい。“狂犬”なんてあだ名が似合わないほどに。

「見つめすぎなんだよ！恥ずかしいんだよ！」

「ぶへらあぁっ！」

訂正します。やっぱり、美奈は“狂犬”というあだ名はピッタリ！老人達の暖かい笑い声が、俺達を包み込んでいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0177c/>

素直にSAY！

2010年10月8日15時55分発行